

一一〇一九年度・学力考查問題【国語】

(中学第三回)

注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は10ページで□・□の二題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていないう場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。
また、特に指示のないかぎり、句読点等も一字に數えます。

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

小学校入学以来、「ケン」、「ウワヤ（＝アッシ）君」、「よつちやん」の男子三人は、「親友同盟」を結成した仲良しとして共に成長して来た間柄でした。

団地の集会場の広場に黒い洋服を着た人達が行列していた。
※¹ ピロティーの柱に「うわや家告別式会場」と書かれた細長い看板が

立てかけてある。ケンは黒い洋服を持っていないので、普段着のジーパンに白いTシャツを着て、ゴミ置場のそばのコンクリートに腰を下ろし、足をぶらぶらさせて手持ち無沙汰の様子でぼうつとしていた。

母親は少しずつ動いて行く列から、時々ケンを見た。

中学に入つてケンは、母親の顔を見て笑うという事がなくなつた。下からすくい上げるように強い視線でみじかくにらみつけるようになった。

足をぶらぶらさせて所在なさげにしていたケンが、急にぱっと生き返つたように跳び上がり笑つて走り出した。

集会場の向こうの公園の木立ちの中から、黒い学生帽に白いワイシャツを着て黒いズボンをはいたよつちやんが、喪服を着た母親と一緒に歩いて来た。

ケンはよつちやんに飛びつくように近づいて帽子を取ると、自分の頭にのせた。

よつちやんの母親とケンの母親は並んで立つた。
「引つ越してご無沙汰していたので、ちつとも知らなかつたんですよ。前からよっぽどお悪かつたとかねえ。奥さん大変ご苦労だつたでしょ。うねえ」

「遠くから大変でしたね」

ケンの母親はウワヤ君の父親とはタニバタさんの送別会で一度会つたきりだった。

※⁴ 新橋で開業している立派な弁護士さんで、小学生の時からウワヤ君は「僕は弁護士になるんだ」と言っていたので、ケンの母親はウワヤ君が父親を尊敬しているんだなと思った。

ウワヤ君の父親に会つた時、ケンの母親は父親を頂点としたしつかりかたまつた家族を見た。それからしばらくして、ケンの父親がケントウワヤ君とよつちやんをブルーに連れて行つたことがあつた。夕方近くになつて少し遅いなと思つていると電話が鳴つた。

「今何時か知つてゐるか。うちのアッシをどこに連れて行つたんだ。常識はないのか。誘拐罪で訴えることも出来るんだぞ、責任はとれるのか」

「どう男の人の声がとび込んで來た。ケンの母親は仰天した。

「あの、主人が連れて行きましたから大丈夫と思ひますが」

「と言うと電話がガチャーンと切れた。五分程するとまた、電話が鳴つた。

「どこへ連れて行つたんだ、訴えるぞ」と言つてまたガチャーンと切れた。早く帰つて来ればいいと、母親はウロウロ家中を歩き回つたり道に出たりした。

しばらくしてまた電話が鳴った。母親は迷つたが電話をとつた。ウワヤ君の母親だつた。

「あの、主人がお宅に電話しましたでしようか」

「すいません、もう帰つて来ると思います」

「この頃ずっと具合が悪くて、事故で頭をうつたもんですから。退院

して来てからあんまりよくなくて、ご迷惑をおかけしています」

「ちつとも知らなくて。大変ですね。もう帰つて来ると思います。ご心配おかけします」

ケンの母親は電話を置いてじいーと立つたまま動けなかつた。

中学に入つてすぐ、ウワヤ君が遊びに来て言つたことがあつた。

「この間なんかオレとトモヒコと母親とユキコ、一晩中車の中で寝たんだぜ、まいっちゃうよ。あんな奴死ねばいい」

「だつて病氣だもの。治つたらまたいい父さんになるよ」

「お母さんかわいそうだよ」

ケンはじいづといつまでもウワヤ君の顔を見て、何にも言わなかつた。あれから三ヶ月もたつていない。

集会場のガラス戸の外で靴をぬいだ。ケンのバスケットシューズとよつちゃんの黒い革靴が並んでいた。なんて大きな靴をはくようになつたのだろう。ケンとよつちゃんは、母親が今まで見たこともないようなくそまじめな顔をした。母親はウワヤ君を見るのがこわかつた。

ウワヤ君は祭壇に一番近いところに座つていた。にぎりこぶしを二つひざの上にのつけて、じつと下を向いている。

黒い学生服の肩がいかつていた。十三歳。十三歳の男の子。ケンの母親は、親友同盟が集まつて遊んでいる時、よつちゃんを末っ子だと

か、ケンを一人っ子だとか思わなかつた。同じ年の男の子が遊んでいたと思つていた。

ウワヤ君は長男だつた。細い首は十三歳の男の子の首で、その首はやせた十三歳の男の子の肩につながり、その肩には長男ががんばつていた。長男のウワヤ君のとなりに五年生のトモヒコ君がいて、そのとなりに二年生のユキコちゃんが座り、ユキコちゃんをかばうように母親が座つていた。十三歳のウワヤ君はにぎりこぶしを両ひざに押しつけて歯をくいしばつている。

ケンの母親は度々葬式に行き、喪主の席にいる中年の長男を度々見事があつたが、十三歳のウワヤ君ほど、堂々たる長男を見たことはなかつたような気がする。

ケンとよつちゃんは並んでウワヤ君の前をソロリソロリと歩き、懸命にお焼香をした。

二人でちらちらお互の手つきを見ている。二人で同時に手を合わせ同時に下ろす。ウワヤ君が目を上げた。ケンとよつちゃんを見て「よつ」という感じで、にぎりこぶしをひらいて手を上げた。一瞬いつも親友同盟の十三歳の顔になつた。ケンとよつちゃんは同時にウワヤ君に向かつて手を上げて、ソロリソロリと歩き出した。ウワヤ君はにぎりこぶしを両ひざの上にまた押しつけた。

ケンとよつちゃんはお葬式が終るのをピロティーの前の広場で待つていた。

広場と公園の仕切りの石に二人で並んで座り、二人とも片方ずつ靴をぬいで、相手の靴をお互いにとりかえている。よつちゃんの革靴が

ケンには入らない。

それから二人は手を合わせて、手の大きさをくらべていた。

ウワヤ君が出て来た。よつちゃんとケンは近寄つて行つて二人でウワヤ君の学生服をぬがせた。よつちゃんは自分でウワヤ君の学生服を着てボタンをかけずに、片足を前に出して、肩をいからせて「ようよう^{※5}」とツッパリ中学生のまねをした。

「だめだよ、そんなの。ちがうんだなあ、よつちゃん、かしてみな」

ウワヤ君はよつちゃんから上着をむしり取つて、うでをまくつて着て、背中をまるめて、肩をくりんくりんと動かして「おめえら、なんだよ」と低い声で言つた。

〔さすがウワヤ君、キマつてます〕

三人は一着の学生服をとつかえひつかえ着て「ようようよう」の真似^ねをして、ウワヤ君は長男ではなく、十三歳の男の子になつていた。

黒い洋服を着た人が何人か側^{そば}を通り過ぎた。

ケンの母親とよつちゃんの母親はだまつて二人を見ていた。

(佐野洋子「十三歳」)『私の息子はサルだった』新潮文庫より)

※1 ピロティー：建物の入り口内側の、広めの空間。

※2 ケンは黒い洋服を持つていらない：「ケン」は「自由な校風」で知られ、受験地獄と無縁なんびりした私立の中学校に進学し、服装も自由だったので、喪服の代用となる制服を持つていなかつたと考えられる。

※3 タニバタさん：小三の終わりに、一家で名古屋に引っ越して行つた。

※4 新橋：東京都港区にある町名。

※5 ツッパリ：強がつて不良のようなそぶりを見せる人のこと。

問――線 a 「所在なさげに」・b 「肩をいからせて」とあります、

本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 所在なさげに

しょざい

ア 居場所がない寂しさに耐えながら

イ 理解されない悔しさを忘れて

ウ 仲間はずれを心細く感じながら

エ することなく退屈そうに

ア 寂しさを必死にごまかして

イ 周囲を威圧する態度を示して

ウ 活気があることを見せつけて

エ 楽しくて仕方がないのを我慢して

b 肩をいからせて

問二 ——— 線1 「母親は少しづつ～～ケンを見た」とあります
が、この時の「母親」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中

から選び、記号で答えなさい。

ア 成長するとともに、最近反抗的になってきたケンの様子が
気になっている。

イ 葬儀の場にふさわしくない服装で来ているケンを、どうし
ても許すことができず気に病んでいる。

ウ 中学入学を機に、ケンとの関係が決定的にうまく行かなく
なったことに絶望を覚えている。

エ 友達の父親を見送る葬列だけに、そこに加わろうとしない
ケンの心の傷の深さを知り、心痛めている。

問五 ——— 線4 「母親はウワヤ君を見るのがこわかった」とありま

すが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で
答えなさい。

ア 息子の同級生のウワヤ君にとって親の死は早過ぎる経験と
して気の毒なことであり、彼の状況を考え合わせて、見続け
ることがはばかられたから。

イ 息子とよく遊んでいた少年のウワヤ君だったはずなのに、
今見かけた彼の表情はあまりにもよそよそしく、人を寄せ付
けないほどの殺氣さえ帶びていたから。

ウ 病気の父親を見かねて願った死が現実となってしまったこ
とを、ウワヤ君はひどく悔やんでいるだろうと考え、可哀相
で表情を直視する気にならなかつたから。

エ 息子たちの姿を見てウワヤ君はどうだろうかと考えたところ
で、葬儀には場違いな、子どもらしい元気いっぱいの表情
になつてしまふのを想像してしまつたから。

問四 ——— 線3 「じいっと」とあります
が、この時の「ケン」の説

明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 友達が自然に口にした弟妹に対する思いやりの気持ちを前
に、自分ならどうするだろうと思いを巡らせて いる。

イ 家族への深い愛情の中で、母親の幸せを最優先して心を痛
める友達の大人びた考えに、すっかり気後れをしている。

ウ 母親の本当の気持ちも知らずに、父親の死を望む言葉を友
達が口にしたことに対し、強い違和感を覚えている。

工 無邪気にして遊んできた友達が、自分には想像もできないよう
な問題に直面していることを感じ取り、何も言えないでいる。

問六 ——線5と6の「ソロリソロリ」から読み取ることとして

は適当でないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 慣れないお葬式の場で、ケンとよつちゃんが余計なことを

してウワヤ君に迷惑をかけてしまわないよう、慎重に行動しようとしている様子。

イ 久しぶりに会ったウワヤ君の、それまでとは違う様子を目

にし、またその場の雰囲気にも圧倒されたケンとよつちゃんが、ぎこちない行動を取っている様子。

ウ 周囲の大人たちの眼が自分達を迷惑がつていると気づき、さすがのケンとよつちゃんも日頃の元気を發揮できず、すっかり怯えている様子。

エ 正しい振る舞い方を知らない分、お互ひを頼りにしながら目立たないようにして、ケンとよつちゃんの動きが静かにゆっくりとなつてている様子。

問七 ——線7「さすがウワヤ君」とありますが、「」での「よつちゃん」や「ケン」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 少し悪ぶつて服装を着崩^{きくず}しているウワヤ君の強がりを見抜^ぬいて冷やかしている。

イ お葬式でがんばっていたウワヤ君を気づかいながら、ツッパリの真似のうまさをほめている。

ウ お葬式では怖い様子だったウワヤ君に対して、ようやく一区切りがついたことで、恐る恐る声をかけている。

問八 ——線8「十三歳の男の子になっていた」とありますが、そ

の説明として最も適当なものを次の中から選んでい。

ア ウワヤ君が、大人としての役割を一時的に投げ出して、少しの間息抜きをしている、ということ。

イ ウワヤ君が、喪主としての大役から解放されて、これまでの少年の表情をしている、ということ。

ウ ウワヤ君が、成長期にありがちな強がりの表情ではない、不安定な様子を見せてている、ということ。

エ ウワヤ君が、心配してくれた大人達を安心させるため、懸命に元気な姿を見せようとしている、ということ。

エ どれも優劣をつける必要のない演技ばかりだったものの、ここでウワヤ君が一番だと伝えて慰め励ましている。

―― 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

成長期にあるときは、「この状態は明日も続く」と信じてしまつものであります。しかし、『成長の限界』の中には人口増加や工業化といった成長がこのまま続ければ、一〇〇年以内に地球は限界に達するという研究報告が明記されています。

一九七四年には世界に先駆けて日本が解決への道を提示しました。『日本人口会議』が開催され、それまで「多産」を推奨していた厚生省が「子どもは二人まで」と出産の抑制を国民に呼びかけたのです。^{*3}日本の食糧やエネルギーの自給率の現状については前述しましたが、こうなることは四〇年以上も前から予測されていたのです。^{いま僕ら}が暮らしている社会は、すでに限界の中ではまわつてはいるといえるかもしません。

人口の増減を議論するときに、重視しなければならないのは一五〇

六四歳の生産年齢人口です。この層は生産と消費を支える人たちで、減れば経済が縮小し、国の税収も少なくなります。極論になりますが、全人口に占める生産年齢人口の割合を高いすいじゅんで維持できていれば、人口の増減にかかわらず社会の仕組みはまわつていくといえます。

日本の生産年齢人口は、一九九〇年頃をピークに、減少に転じました。二〇一三年には三二年ぶりに八〇〇〇万人を割り込み、割合でいえば六二・一パーセントに縮小。その一方で、六五歳以上の人割合を示す高齢化率は過去最高の二五・一パーセントに達しています。そ

して「人口推計」では生産年齢人口の割合は今後も減り続け、高齢化率は上昇を続けると予測されています。

この動向から、若い読者のみなさんはどんな未来が見えてくるでしょうか？ 高齢化率が上がることによって、確実にいえるのは福祉がいま以上に重要になつてくるということです。が、生産年齢人口が減り、税収も減るとなれば、福祉に潤沢な予算がつけられる見込みはない。国のサイフの中身（財政支出）は九六兆円で、そこから三〇兆円が厚生労働省の社会保障費として使われています。国土交通省の公共交通事業費が六兆円ですから、すでに日本では相当なお金が福祉のために費やされていることがわかると思います。

この現実に、僕の思考の中では『成長の限界』という言葉が重なってきます。^{*4}「日本には人口が一億人以上いないと成り立たない仕組みが数多くある」と序章で述べましたが、これからはお金をかけずに福祉を充実させるアプローチを僕らは探つていかなければならぬのです。

日本の社会が地域の問題をお金で解決する仕組みをつくり、いたれりつくせりのサービスが登場してきたことは、「自分たちでなんとかしよう！」という住民の主体性を薄めてしましました。その関係性を端的に表している例が、一九六九年に千葉県の松戸市役所に設置された「すぐやる課」です。その後、同様の課がいくつもの役所につくられましたが、電話をすれば自治体の職員がすぐにやつてくれると思えば、住民はまちの「お客様」になってしまいます。

「すぐやる課」をつくった役所の意図が、「待たされる」「時間がかかる」といったお役所仕事のマイナスイメージを払拭し、迅速な住民サー

ビスを提供することにあつたのは容易に推察できます。しかし、道路の清掃などの作業を住民が当然のように役所に持ち込む風潮がつくら

れていったのは、行政のやり方にも一因があつたと思えてなりません。もしも役所が、「あなたと一緒にすぐやる課」というネーミングを採用していれば、住民の意識も少しは違つてきたのではないでしょうか。

僕たち^{※5}、ミニティデザイナーが頼まれる仕事も、じつは役所にか

かつてくる住民からの電話の内容と共通した部分があります。一言で表せば、Xといふものです。

そういう依頼^{※6}に対し、僕らは解決策を提示するわけではありません。まちの問題は、まちに暮らす人たちが主体的に解決する。一人でも多くの住民を^⑤まき込み、住民たちがアイデアを出し合い、その中から最善と思う解決策を住民たちが探り当て、住民たちの手で実行するまでのお手伝いをするのが僕らの仕事です。もしも客席から舞台を見^⑥るような感覚の住民がいたら、僕らはあらゆる手法を駆使してその人を舞台に引っ張り上げます。主体となるのはまちの人たち。主役が客席に座っているうちは、幕を開けることができないのです。

日本をどんな姿にしていくか？

その方向性を定めた国の計画があります。一九六〇年代から一〇年ごとにつくられてきた「全国総合開発計画」です。^{5) 6) 7)} 略称で「全総」と表記されることもあり、第四次までの計画は「全総」「新全総」「三全総」「四全総」と呼ばれてきました。第五次の計画は一九九八年に策定され^{※6}、第六次となる「国土形成計画」が二〇〇八年にスタートして

います。

これまでの計画の中身については細かく説明しませんが、毎回大きなテーマとなつていたのが「東京一極集中をどう打開するか」ということでした。地方から首都圏に人が押し寄せる傾向は、国のあり方としてよろしくないという問題意識は、政治の世界でも常に考えられてきたことです。

しかし、国の計画は抜本的な対策とはならなかつた。B、地方と東京をつなぐインフラを整備し、東京の人口を地方へ戻そうという計画。高速道路や新幹線が開通すると、Cストロー現象が起きて、地方の人たちのほうが東京へすい寄せられてしまつたのです。

地方の価値を高めるべく、地域自立圏を設定したり、工業都市をつくったこともありました^⑦が、うまくはいかなかつた。僕がH e m 21の主任研究員として里山を^⑧ちょうどさしたときにも使われていた「多自然居住地域」も国の計画から生まれた造語でしたが、広く伝わることはなかつた。全国に光ケーブルを張りめぐらせてITインフラも整備されただけで、これも今のところ東京から地方に人を呼び戻す決定打にはなつていません。

「国土形成計画」からもうすぐ一〇年。次の一〇年に向けた新しい計画の策定が国土交通省の中でそろそろ始まるはずです。D、これまでの経緯を振り返れば、国交省が主導する計画だけで東京一極集中を解消し、地方に人が集まる國のかたちができるとは、正直言つて大きな期待はできない。

国土の保全だけでなく、経済や生活といった視点もセットにしなければ、僕らが望む未来は見えてこないはずです。必要なのは経済産業

省や厚生労働省と連携し、生産年齢人口の「働き方」や「生き方」を反映した計画をつくることではないでしょうか。

二〇一四年に施行された「まち・ひと・しごと創生法」では、地方における雇用の創出が重点課題として掲げられています。しかしこれも、企業を地方に誘致して雇用をつくるだけでは、都市部と同じ構造を持ち込むことしかありません。僕らが考えるべきは、資本主義的なシステムに振り回されない「働き方」と、個人主義的な価値観に惑わされない「生き方」の実践なのです。

どの地方にも都会にはない資源がたくさんあるし、それがふるさとの魅力であります。そして、ふるさとの魅力を活かす働き方は、ふるさとに生きる人たちが自らつくり出せるものだと僕は思っています。

「働き方」については後で詳しく述べますが、日本の中山間離島地域には、都會では味わえない豊かな働き方を見つけた人がたくさんいます。

都市部の人口を地方に分散するという考え方——言い換えば、ふるさとを変えるという発想はすべてもいいのではないか?

大切なのは、日本中のふるさとが元気になることであり、そのヒントはふるさとの中にいくらもある。だつたら、ふるさと⁴が変わればいいのです。

ふるさとの魅力を再発見し、その土地で豊かな人生を開拓した人が増えれば、その⁵「事実」こそが都市部の人向けた強烈なメッセージになる。「うらやましい、あんな生活を自分も味わってみたい!」と感じた都會の若者たちは、きっと自らの意志でふるさとの生活に飛び込んでくるに違いありません。それこそが「地方創生」の近道になると

僕は思うのです。

(山崎亮『ふるさとを元氣にする仕事』筑摩書房より)

僕は思うのです。

※1 『成長の限界』：一九七二年に発行された本の題名。

※2 厚生省：現在の厚生労働省（厚労省）。

※3 日本の食糧：前述しましたが：「現代日本は食糧やエネルギーを外国に頼らなければならなくなっている」という内容のことが述べられている。

※4 「日本には、序章で述べましたが：「今日の社会保障などの仕組みは、一〇〇年前から始まった人口増加の流れの中でできあがつたもの」という内容のことが述べられている。

※5 コミュニティデザイナー：住民のつながりを重視した地域を作っていく仕事をする人。

※6 グランドデザイン：事業についての、全体の構想や計画。

※7 インフラ：道路や鉄道、学校など生活の土台となるもの。

※8 H e m 21：「ひょうご震災記念21世紀研究機構」という組織。

阪神・淡路大震災の教訓から、安全・安心なまちづくり、共生社会の実現を図る。

中山間離島地域：山あいや、離れ小島のこと。

問一 線あそびのひらがなを漢字に直しなさい。

問二

A D

に入る言葉として適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を二度使ってはいけません)。

ア でも イ いわゆる

ウ そして エ たとえば

イ 地球規模での人口増加は避けなければならなくなるため、日本の生産年齢人口の減少と福祉の問題は、どちらも解決す

ることが不可能になるから。

問三

イ いわゆる

線1「すでに限界の中でもまわっている」とあります。その説明として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 急激な人口増加によって、人々はいつ来てもおかしくない破滅におびえている、ということ。

イ これ以上人口が増加したら人類は破滅すると、先進諸国が改めて主張している、ということ。

ウ 工業化や人口の問題によって、日本はすでに立ちゆかなくなっている状況にある、ということ。

エ 日本だけでなく、各国が互いに助け合わなければ暮らしが成り立たなくなっている、ということ。

問五 線3「住民はまちの～します」について。

(1) 「住民」が「まちの『お客さん』にな」とはどういうことですか。「税金」という言葉を用いて、五十～六十字で説明しなさい。

(2) 一方でコミュニケーションデザイナーである筆者ならば、「お客さん」に、どのように対応すると述べていますか。それをたとえて用いて表現している一文をさがし、最初と最後の三字を抜き出しなさい。

問四 線2「この現実に～重なってきます」とありますが、その理由として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

問六

X

に入る言葉として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 福祉は重要だが、今日のようないくつかの動向がしばらく続く上に、日本経済の成長も見込めないので、福祉を充実させる方法は容易には見つけられないから。

ア こうなる前に対策を立てておいてくれ
イ 少しこつちの仕事を手伝ってくれ

ウ 困っているからなんとかしてくれ
エ 今後どうしたらいか教えてくれ

問七 線4 「ふるさとが変わればいい」とあります、その説明として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア ふるさとで暮らしながら、その魅力に気づく人が増えることによって、ふるさとが都会では味わえない豊かさを持つ場になっていくのが望ましい、ということ。

イ ふるさとに移住する者を増やすことで、人口減少時代における様々な課題を乗り越えるためのヒントを、世界に示す実例になるのが望ましい、ということ。

ウ ふるさとで自分なりの生活スタイルを発見した人が増えた、ということを発信することで、都市部の人口の流出先として機能していくのが望ましい、ということ。

エ ふるさとが独自の魅力にあふれた地域とみなされ始めたことによって、ふるさとの今後のあり方を皆で考えるようになっていくのが望ましい、ということ。

問八 線5 「『事実』とあります、その説明として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 地方であっても、都会に負けないくらい豊かな生活が送れる人に気付いた人が増えている、ということ。
イ 必ずしも国の計画通りでなくとも、実際にふるさとで豊かな生活を実践する人が確実に増える、ということ。

ウ 自分の意志で地方での生活を送ることを決め、地方創生の担い手となる若者が増える、ということ。
エ まだ一部の動きはあるものの、実際に都市部から地方へと流出する人口が増えている、ということ。

〔国語〕

解答用紙（中学第三回）

受験番号

氏名

得点

二

問

一

あ

すいじゅん

(い)

ま
き込み

(う)

す
い寄せ

(え)

ちようさ

(お)

す
て

問

七

問

八

問

三

問

四

問

五

問

六

一

問

一

a

b

問

二

受験番号

氏名

得点

問

六

(2)

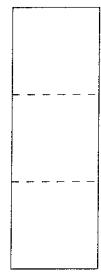
問

七

3

問

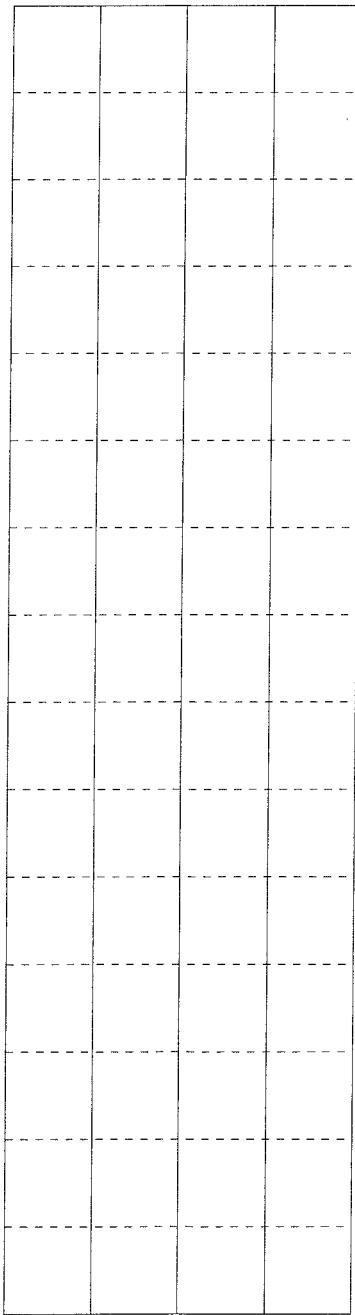
八



問

五

(1)



問

二

A

B

C

D

問

三

問

四